

台風 24 号と 25 号の狭間をぬって、10 月 5 日から 6 日間中央アジアに位置する旧ソビエト連邦の共和国ウズベキスタン共和国へ行ってきました。

旅行の 4 日目にこの旅行のハイライトである古都サマルカンドを訪れました。

サマルカンドは、紀元前よりシルクロードの要所として様々な民族、そして文化が交差した街。「地球上で最も美しい」と謳われたこの街は、13 世紀チングス・ハン率いるモンゴル軍に破壊された後に、ウズベキスタンの英雄ティムールが復興した都です。

サマルカンドには、ウズベキスタンの観光資源の一つにあたる工芸品のサマルカンドペーパーを作っている工房「Koni Ghil MEROS (コニギル・メロス)」があります。

サマルカンドペーパーの歴史は、タラス河畔の戦い（唐とアッバース朝が中央アジアの覇権を巡って争った戦争）で、中国人捕虜の製紙職人から紙漉きの技術が伝えられたことから始まりました。

シルクのような光沢をもつサマルカンドペーパーはシルクペーパーともいわれ、イスラム世界、そしてヨーロッパにまで製紙技術が伝えられました。19 世紀中頃には機械生産が始まり、サマルカンドペーパーは衰退して行きました。

サマルカンド工芸の復興と振興を目的として、1996 年に NGO「サマルカンド工芸協会 (MEROS)」は設立されました。2010 年 4 月から JICA の草の根協力支援型事業によって派遣された日本の NPO「植物資源の力」が復興支援を行いました。その拠点となった「コニギル・メロス紙漉き工房」を訪問しました。



コニギル・メロス紙漉き工房



玄関近くに群生していた桑の木



枝から剥がした表皮から硬い部分を取り除き  
韌皮（じんぴ）を取り出す



韌皮を煮込む



乾燥した韌皮



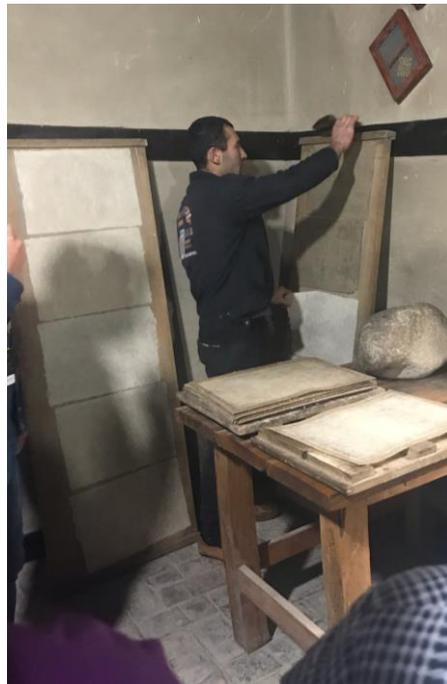
工房の外にある水車の動力を利用したビーター（叩解機）



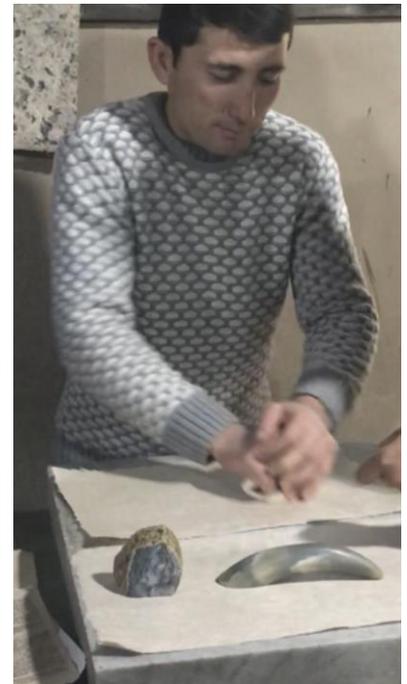
漉桁（すきげた）と漉舟（すきふね）



重石をのせてプレス



板張りして乾燥



乾燥した紙を石や貝で磨く

日本のNPOの方が技術指導したとあって、ほぼ和紙の紙漉きの工程と同じでした。

最後の石などで紙を磨く工程だけが違っていました。これはペンのすべりが良い滑らかな表面を作る為でかつて中央アジアで使用されていた硬い筆記具に対応していたと思われます。

サマルカンドペーパーは、「世界で最も美しい紙」といわれコーランや細密画などの紙として使用され評価を得ていました。

中国から伝わり中東・欧州に紙を伝播したサマルカンドペーパー、これからも無くならずに残って欲しいです。